

高校の進路指導・キャリア教育に関する調査 2014

高校の進路指導の 「現状」と「変化の兆し」

山下真司

リクルート「キャリアガイダンス」編集長

全国各地の高校を取材する中、ここ数年、進路指導やキャリア教育の動きが活発化していることを感じる。

下記は、高校におけるアクティブラーニング型授業等の授業改善の取り組み状況の結果である。

約半数の学校が、既に生徒の主体的な学びへの転換に取り組んでいることがわかる。

リクルート進学総研が隔年で実施している「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査 2014」から、

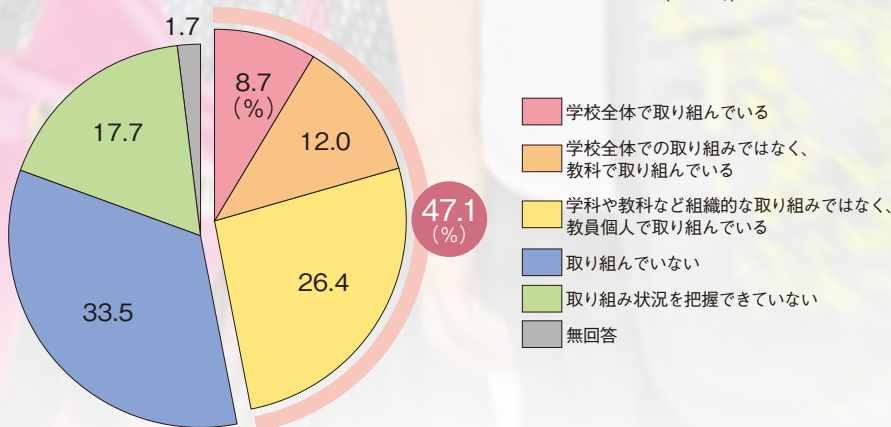
高校における進路指導やキャリア教育の取り組み状況、

グローバル化やICT教育の対応など、「現状」と「変化の兆し」を報告する。

動き出している高校での取り組みの理解から、

大学や専門学校における教育の接続の参考に、ぜひして頂きたい。

アクティブラーニングなど授業改善の取り組み (全体/単一回答)
(n=1140)



【調査概要】

「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査 2014」

- 調査目的 全国の全日制高等学校で行われている進路指導の実態を明らかにし、授業改善実施状況及び今後の実施意向を把握すること。
- 調査方法 質問紙による郵送法
- 調査対象・対象校数 全国の全日制高等学校4836校の進路指導主事
- 調査期間 2014年10月6日(月)～2014年10月31日(金)
(11月5日到着分までを集計対象とした)
- 有効回答数 1140校(回収率23.6%)
*設置者別:国公立836校、私立295校、無回答9校

1 進路指導の現状は？

図表1 進路指導を難しいと感じているか (全体/単一回答)

| 凡例 | (%) | 難しい計 | | 難しい計 | 難しい計 |
|-------------------|------------------|--------------|-------------|------|------|
| | | 非常に難しいと感じている | やや難しいと感じている | | |
| 2014年 全体 (n=1140) | | 31.6 | 58.4 | 8.3 | 1.1 |
| 2012年 全体 (n=1179) | | 34.6 | 56.6 | 6.7 | 1.4 |
| 2010年 全体 (n=1208) | | 38.4 | 54.4 | 5.8 | 1.1 |
| 2014年 大短進学率別 | 70%以上 (n=530) | 33.2 | 55.8 | 9.2 | 0.9 |
| | 40~70%未満 (n=212) | 34.4 | 56.1 | 8.0 | 0.9 |
| | 40%未満 (n=389) | 27.5 | 63.2 | 7.5 | 1.3 |
| 2012年 大短進学率別 | 70%以上 (n=539) | 24.7 | 62.2 | 10.4 | 2.0 |
| | 40~70%未満 (n=234) | 42.7 | 52.1 | 3.8 | 0.9 |
| | 40%未満 (n=388) | 44.6 | 50.8 | 3.4 | 1.0 |
| 2010年 大短進学率別 | 70%以上 (n=501) | 26.1 | 63.1 | 8.8 | 1.4 |
| | 40~70%未満 (n=255) | 38.0 | 56.1 | 3.9 | 1.6 |
| | 40%未満 (n=443) | 52.6 | 43.6 | 3.4 | 0.5 |

● 進路指導の困難度

9割が難しさを感じている

進路指導の担当者は、現在の進路指導についてどのように感じているのだろうか。

まず全体傾向で捉えると、32%が「非常に難しい」と回答(図表1)しており、「やや難しい」と合わせると、全体の9割が進路指導に難しさを感じていることが分かる。経年で見ると、前回調査(2012年)よりも微減しているものの、進路指導の難しさの状況は大きくは変わらない。

大学・短大への進学率別に見てみると、2012年と比較して、70%以上の学校で「非常に難しい」という回答が増加したのが今回の特徴だ。その要因を見てみると(図表3)、進学率95%

以上の高校では、【進路環境の問題】「入試の多様化」68%、【保護者の問題】「保護者が干渉しすぎることに」51%、「子どもに対する過剰な期待」50%となっており、特に保護者の問題は他進学率の категорияと比べても抜きん出て高いことが分かる。

● 進路指導の困難な要因

「教員の時間不足」「入試の多様化」

では、その要因とは何だろうか。進路指導について「非常に難しい」「やや難しい」の回答者にその要因を全て選んでもらった(図表2)。

トップは【学校の問題】「教員が進路指導を行うための時間の不足」が68%、続いて【生徒の問題】「進路選択・決定能力の不足」が67%、【進路環境の問題】「入試の多様化」60%と

なっている。以下、【生徒の問題】「学習意欲の低下」55%、「職業観・勤労観の未発達」52%、「学力低下」51%と続く。

前回調査との変動をみると、「教員が進路指導を行うための時間の不足」、「入試の多様化」が10%程度増加している。反対に10%以上減少しているのは「家庭・家族環境の悪化:家計面」「産業・労働・雇用環境の変化」「高卒就職市場の変化」であった。

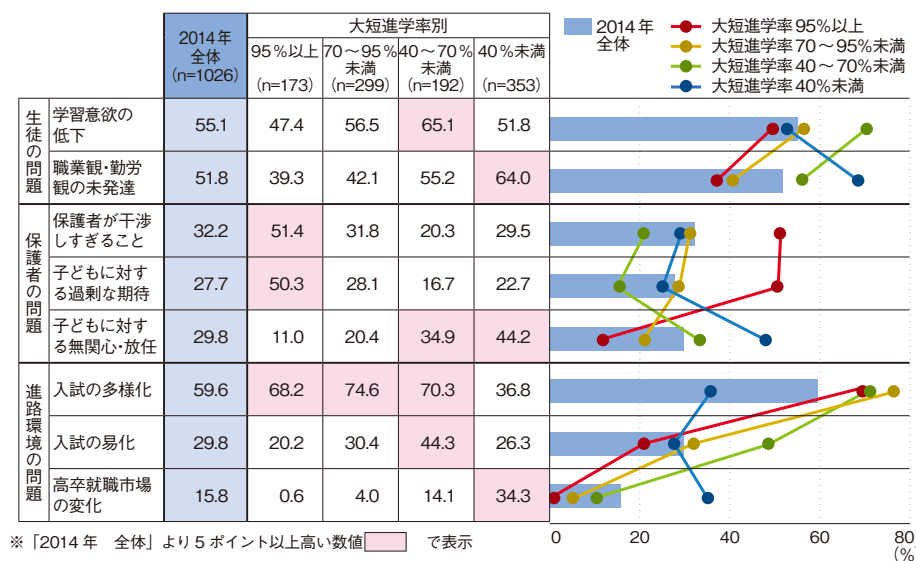
景況感の改善の兆しを受け、就職環境の不安は相対的に減少している一方で、推薦・AO入試や一般入試など、多様化する入試方法の対応に、個々の生徒に十分時間を掛けた進路指導の対応ができない教員の多忙な実態がうかがえる。

図表2 進路指導の困難の要因の変化(進路指導を「難しい」と感じている/複数回答)

| | 2014年 全体 n=1026 | 2012年 全体 n=1075 | 2010年 全体 n=1121 | 2008年 全体 n=832 | 2004年 全体 n=1018 | |
|-----------|-----------------------|-----------------|-----------------|----------------|-----------------|------|
| 生徒の問題 | 進路選択・決定能力の不足 | 67.3 | 67.3 | 66.2 | 65.0 | 68.0 |
| | 学習意欲の低下 | 55.1 | 57.6 | 56.8 | 60.0 | 44.5 |
| | 職業観・勤労観の未発達 | 51.8 | 56.8 | 52.4 | 51.9 | 61.3 |
| | 学力低下 | 51.3 | 52.1 | 50.5 | 45.3 | 54.1 |
| | 規範意識・道徳意識の低下 | 16.2 | 23.7 | 24.7 | 24.4 | * |
| 保護者の問題 | 進路環境変化への認識不足 | 48.9 | 52.2 | 51.7 | 52.2 | 60.9 |
| | 家庭・家族環境の悪化:家計面について | 48.5 | 61.0 | 62.7 | * | * |
| | 保護者が干渉しすぎることに | 32.2 | * | * | * | * |
| | 子どもに対する無関心・放任 | 29.8 | 29.1 | 29.4 | 32.2 | 32.6 |
| | 子どもに対する過剰な期待 | 27.7 | 30.2 | 27.5 | 27.9 | * |
| | 家庭・家族環境の悪化:家計以外の面について | 13.9 | 14.4 | 17.5 | * | * |
| 学校の問題 | 学校や教師への非協力 | 7.2 | 7.9 | 9.3 | 10.3 | 10.9 |
| | 教員が進路指導を行うための時間の不足 | 68.3 | 58.8 | 61.0 | 62.1 | * |
| | 校内連携の不十分 | 32.7 | 31.2 | 32.5 | 34.0 | 40.5 |
| | 教員の実社会に関する知識・経験不足 | 25.2 | 25.3 | 21.7 | 25.0 | * |
| | 教員の意欲・能力不足 | 24.9 | 23.9 | 24.8 | 25.8 | 24.8 |
| | 旧態依然とした教員の価値観 | 24.7 | 21.7 | 20.5 | 24.3 | 33.7 |
| 進路環境の問題 | 生徒とのコミュニケーション不足 | 16.8 | 18.9 | 18.6 | 22.4 | 27.3 |
| | 入試の多様化 | 59.6 | 48.6 | 48.7 | 60.8 | * |
| | 産業・労働・雇用環境の変化 | 35.0 | 48.7 | 53.7 | 45.6 | 48.0 |
| | 仕事や働くことに対する価値観の変化 | 31.2 | 30.1 | 24.7 | 18.5 | 34.4 |
| | 入試の易化 | 29.8 | 27.3 | 29.9 | 39.5 | 26.9 |
| | 上級学校の学費高騰 | 17.2 | * | * | * | * |
| 高卒就職市場の変化 | 15.8 | 34.2 | 45.9 | 24.0 | 47.6 | |

カテゴリーごと、「2014年 全体」の降順 【】:該当項目なし (%)

図表3 進路指導の困難【抜粋】(進路指導を「難しい」と感じている/複数回答)



*「2014年 全体」より5ポイント以上高い数値で表示

FREE COMMENT

【進路選択・決定能力の不足】

●最後まで自分自身が進学する大学・学部を決められない状況で、最後は教員や保護者に頼る生徒がいる(北海道・普通科)

●学習活動についても言えることだがすべてにおいて受け身の姿勢の生徒が目立つ。主体的に行動することができていない(東京・普通科)

【学習意欲の低下】

●高校への入学が、既にゴールであるように見受けられる生徒が多い(長野・普通科)

●スマートフォン等の普及による学習意欲の低下(三重・普通科)

●学びに対する意欲が低く、「やっても無理、無駄」という意識が生徒・教員にある(和歌山・総合学科)

【進路指導を行うための時間の不足】

●生徒や保護者と十分なコミュニケーションや情報交換が行えない。教員同士の情報交換や助言の時間も取れない(東京・普通科)

●教員が応募前の見学付添や電話対応、来客対応で授業に出られなくなってしまうことがある(大阪・専門学科)

【保護者が干渉しすぎることに】

●保護者の方が先に妥協してしまう(茨城・普通科)

●子供の希望を聞くことなく、保護者の主観で進路が変更されて、生徒の意欲がなくなる(熊本・普通科)

【子どもに対する無関心・放任】

●保護者を対象にガイダンス等を行っても参加率が非常に悪い(岩手・専門学科)

●子どもと保護者の間で会話がなく、入学金などを納める時になって、「金がない」と進路変更をする生徒が増加している(埼玉・普通科)

2 高校におけるキャリア教育の進展度は？

●「キャリア教育」の10年

効果に期待、肯定的な意見が増加

「キャリア教育元年」(2004年)と謳われてから10年が経過した今、高校におけるキャリア教育の取り組み状況はどうなっているのだろうか。

紙幅の関係上、データの掲載は割愛するが、「キャリア教育についてどう考えているか」という問いに対して、「生徒にとって有意義だと思う」が68%と突出しており、10年前の調査から約15ポイントアップしている。さらに「望ましい進路指導が実現できそうな期待がもてる」40%と

ともに肯定的な回答が増した。

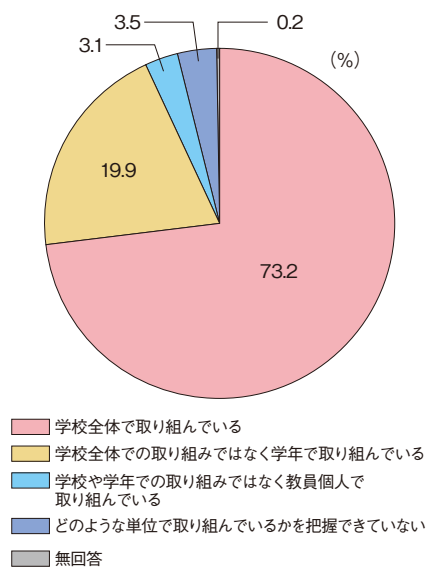
他方、「提唱されているどおりに現場が取り組むとしたら、教員の負担は大きくなりそうだ」42%、「学校現場で浸透するかどうかは未知数」35%は、前回調査から微減・横ばいとなっており、全体的な傾向ではキャリア教育の狙いや効果期待について実感されてきた10年といえる。

● キャリア教育の実施体制

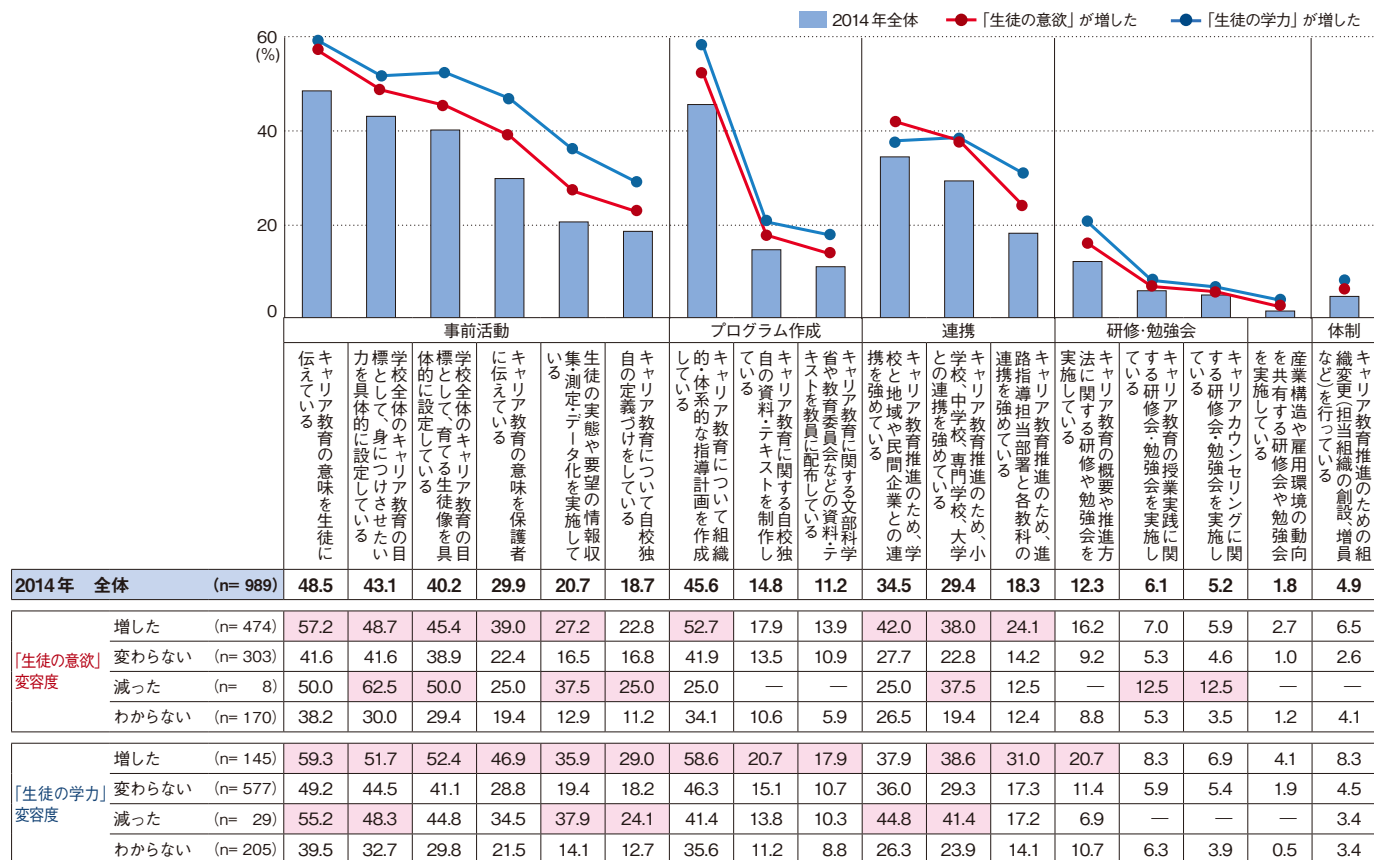
教科指導を通じたキャリア教育へ

では、キャリア教育はどのレベルで取り組まれているのだろうか(図表4)。

図表4 キャリア教育の実施体制
(キャリア教育実施校/単一回答)
(n=989)



図表5 キャリア教育の推進状況 (キャリア教育実施校/複数回答)



※カテゴリごと「2014年 全体」の降順 ※「2014年 全体」より5ポイント以上高い数値を [] で表示

「学校全体で取り組んでいる」73%、続いて「学年で取り組んでいる」20%となっており、組織的に取り組まれていることが分かる。

また、キャリア教育の実施時間について尋ねたところ(図表6)、1位「総合的な学習の時間」80%、2位「ロングホームルーム」64%と例年と傾向は同じだが、4位「教科の時間」は、前回調査よりも6ポイント増え、29%に上がっている。「イベント型」から、教科指導を通じて取り組む「日常型」のキャリア教育が増加していることがうかがえる。

● キャリア教育の推進状況

生徒の意欲・学力が増加

次に、キャリア教育の推進と生徒の意欲・学力とはどう関係するのかを調べてみたのが図表5だ。

生徒の意欲・学力が増したと回答したキャリア教育実施校では、【事前活動】【プログラム作成】【連携】の取り組み各項目が全体スコアを上回っている傾向にあることが分かる。とりわけ、【事前活動】「キャリア教育の意味を保護者に伝えている」、【プログラム作成】「キャリア教育について組織的・体系的な指導計画を作成している」、【連携】「キャリア教育推進のため、進路指導担当部署と各教科の連携を強めている」が、「変わらない」「減った」学校よりも高い。

生徒や保護者にキャリア教育の意味を伝え、学校としてキャリア教育に計画的に取り組んでいる学校では、生徒の「意欲」や「学力」の増加と相関関係があることが分かる。

FREE COMMENT

キャリア教育の実施について

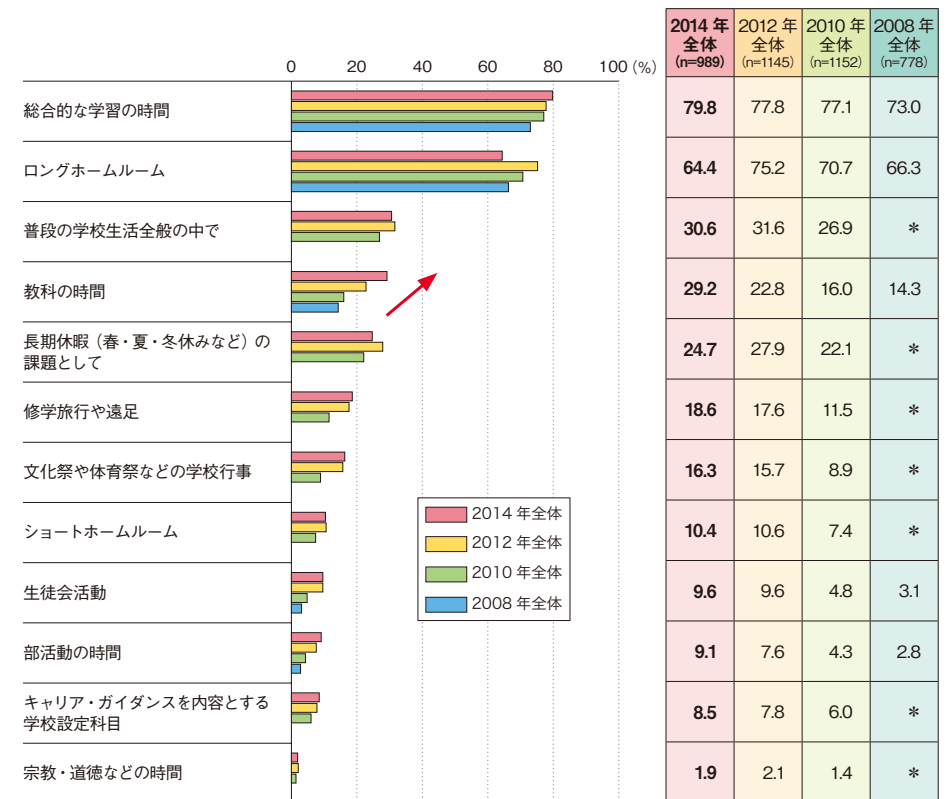
【生徒にとって有意義だと思う】

- 何になりたいかではなく、そもそも何のために働くのかという、価値観の涵養が必要だと思います(福島・普通科)
 - 自己理解力を育てること、変化する状況に対応する問題解決能力を育てることは、これからの社会を力強く生きていくことが求められる生徒にとっては、とても有意義(神奈川・普通科)
 - キャリア教育なくして卒業をさせるから大学をやめたり社会で活躍できない人材になったりするのではないかと。自立して生きていくために必要な能力や態度の育成(奈良・普通科)
- 【教員の負担が大きくなりそう】
- かなり負担になっているのが現状である。就体体験を行うだけでも、多くの

エネルギーを使っている(兵庫・総合学科)

- 地域や外部との折衝に時間と労力がかかり過ぎる(千葉・普通科)
- キャリア教育専門の部署を立ち上げないとまわらないと思われる(愛知・普通科)
- 【望ましい進路指導ができそう】
- 本当にやりたいと思う学問に出会える(栃木・普通科)
- 大学進学希望者が多数を占める学校です。どうしても教科科目の成績のみで単線的に進路を考えがちな生徒が多くなりますが、キャリアプランニングという発想を加えることで生徒の将来像の描き方が多様で複線的なものになると期待できるから(静岡・普通科)

図表6 キャリア教育の実施時間(キャリア教育実施校/複数回答)



※「2014年 全体」の降順 [*]: 該当項目なし

3 今後必要とされる能力、生徒が持っている能力は？

● 将来、特に必要とされる能力
「主体性」「課題発見力」「実行力」

経済産業省で定義されている社会人基礎力の12の能力要素のうち、生徒が将来社会で働くにあたり、「特に必要とされる能力」、ならびに「生徒が現在持っている能力」について、教師がどのように捉えているか、それぞれ3つまで選んでもらった(図表7)。

社会で必要とされる能力については、1位「主体性」56%、2位「課題発見力」43%、3位「実行力」35%、4位「発信力」30%となっており、社会人

基礎力のカテゴリーでみると、「前に踏み出す力(アクション)」や「考え抜く力(シンキング)」の項目が上位にあがっているのが分かる。

● 生徒が現在持っている能力
「規律性」「傾聴力」「柔軟性」

一方、生徒が現在持っている能力については、1位「規律性」40%、2位「傾聴力」25%、3位「柔軟性」18%となっており、両者の傾向にギャップが存在する。

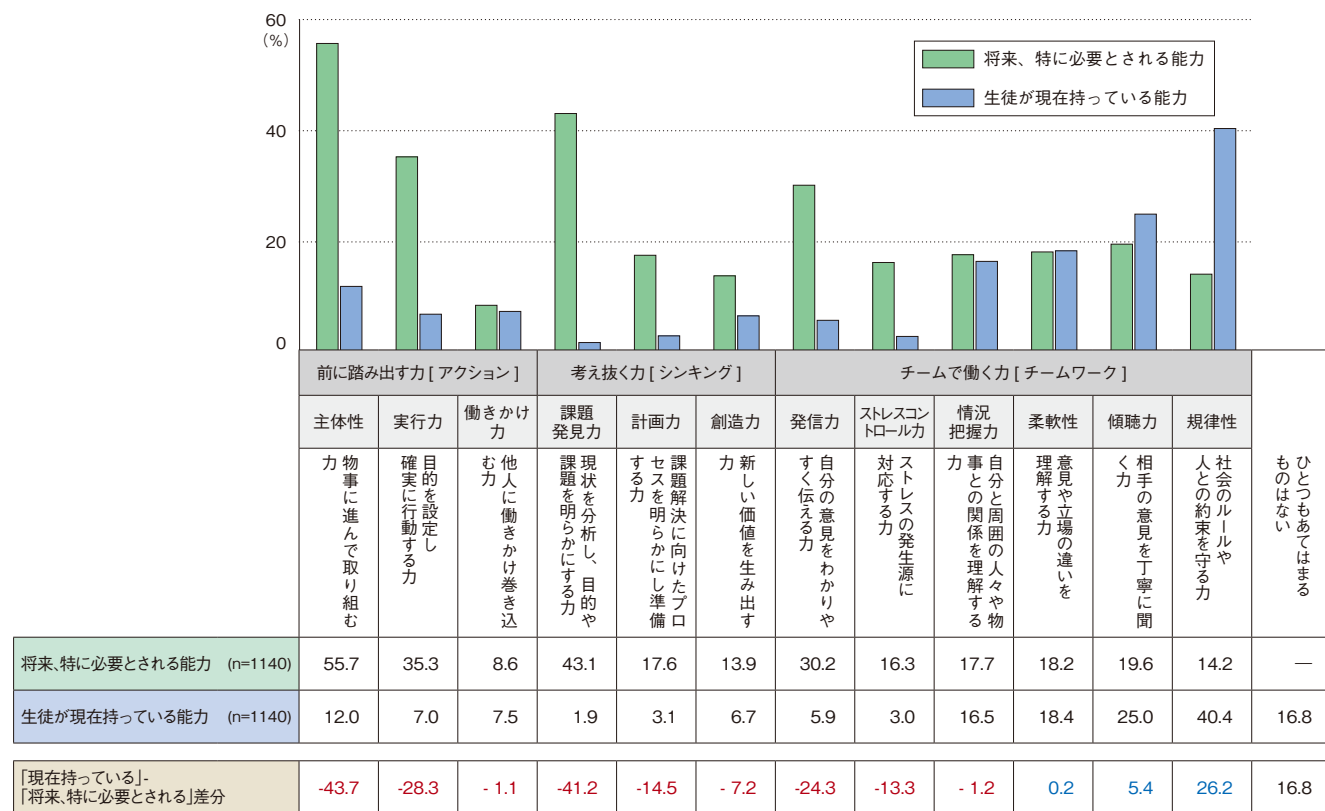
なかでも、「主体性」「課題発見力」については40ポイント以上の差があり、さらには「実行力」「発信力」「計画

力」「ストレスコントロール力」についても差が大きい。

昨今、高校では高大接続・連携や地域課題に取り組むPBL型の学習に取り組む学校が増えてきている。新しい時代を迎える社会に向けて、課題発見&解決していく力の育成に、今後ますます期待が高まっていくことだろう。

参考までに、高校生が現在持っている能力について、弊社が行った『高校生価値意識調査2014』(2014年4月実施)と比較すると、上位項目の顔ぶれに違いはなく、高校生と教員の認識はほぼ一致しているのが分かる。

図表7 社会人基礎力：「将来、特に必要とされる能力」と「生徒が現在持っている能力」(全体/各3つまで回答)



4 高校で急速に広がる授業改善 (アクティブラーニング型授業)

図表8 アクティブラーニングなど授業改善の取り組み (全体/単一回答)

| 凡例 | 導入・計 | | | 取り組み状況を把握できていない | 取り組んでいない | 無回答 | 導入・計 |
|-------------------|------------------|---------------------------|----------------------------------|-----------------|----------|-----|------|
| | 学校全体で取り組んでいる (%) | 学校全体での取り組みではなく、教科で取り組んでいる | 学科や教科など組織的な取り組みではなく、教員個人で取り組んでいる | | | | |
| 2014年 全体 (n=1140) | 8.7 | 12.0 | 26.4 | 17.7 | 33.5 | 1.7 | 47.1 |
| 設置者別 | | | | | | | |
| 国公立 (n=836) | 9.1 | 12.7 | 26.6 | 17.7 | 32.5 | 1.4 | 48.3 |
| 私立 (n=295) | 7.8 | 10.5 | 26.1 | 17.6 | 36.3 | 1.7 | 44.4 |
| 高校タイプ別 | | | | | | | |
| 普通科 (n=852) | 9.4 | 12.1 | 28.2 | 16.4 | 32.7 | 1.2 | 49.6 |
| 総合学科 (n=72) | 2.8 | 16.7 | 29.2 | 20.8 | 25.0 | 5.6 | 48.6 |
| 専門高校 (n=135) | 6.7 | 10.4 | 13.3 | 25.2 | 41.5 | 3.0 | 30.4 |
| 大短進学率別 | | | | | | | |
| 70%以上 (n=530) | 10.6 | 13.0 | 33.0 | 14.0 | 27.9 | 1.5 | 56.6 |
| 95%以上 (n=204) | 9.8 | 12.7 | 33.8 | 13.2 | 29.4 | 1.0 | 56.4 |
| 70~95%未満 (n=326) | 11.0 | 13.2 | 32.5 | 14.4 | 27.0 | 1.8 | 56.7 |
| 40~70%未満 (n=212) | 8.5 | 11.8 | 22.2 | 20.3 | 36.8 | 0.5 | 42.5 |
| 40%未満 (n=389) | 6.4 | 11.1 | 19.8 | 21.3 | 39.3 | 2.1 | 37.3 |

● 授業改善の取り組み
広がるアクティブラーニング型授業

中央教育審議会は昨年12月22日、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)」をまとめた。その中で、高校の教育について、「課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習・指導方法であるアクティブラーニングへの飛躍的充実を図る」と提言された。

では、高校現場ではいったいアクティブラーニング型の授業がどのくらい取り組まれているのだろうか。

今回の調査では、約半数に当たる47%の高校で取り組んでいるとの回答を得た(P43)。教員によるチョーク&トークの一斉授業スタイル(Teaching)から、生徒が学習の主体となる授業スタイル(Learning)への転換が進んでいる。

● 授業改善の現状
牽引しているのは意識の高い教員

しかし、詳細を見ると、授業改善に取り組んでいる学校の過半数(全体の26%)は「学校や教科など組織的な取り組みではなく、教員個人で取り組んでいる」であり、「学校全体で取り組んでいる」9%、「学校全体での

取り組みではなく、教科で取り組んでいる」12%と、現状は意識の高い教員個人が牽引している様子が見えてくる(図表8)。

こうした状況の中、アクティブラーニング型の授業へ転換する動きが、全国各地の高校で活発化している。講師を招聘して校内研修会を実施し、授業スキル向上や教員の意識改革を促すのが狙いだ。周辺の高校に声を掛けて取り組む高校もある。教員個人の取り組み中心から、学校全体の組織的な取り組みが高まれば、高校の教育の質的転換は加速する。と同時に、高等教育との教育の接続が焦点となってくるだろう。

5 グローバル化、ICT化の取り組みの現状

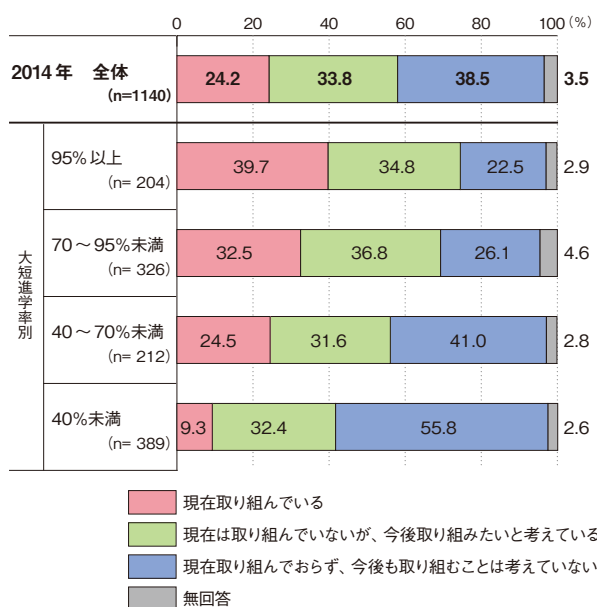
● グローバル化への対応

24%が意識した教育に取り組み中

グローバル化社会を意識した教育に高校はどう取り組んでいるのだろうか。現状を尋ねたところ(図表9)、「現在取り組んでいる」は24%、「現在は取り組んでいないが、今後取り組みたいと考えている」34%を合わせると過半数を超える。他方、「今後も取り組むことは考えていない」は39%と、意向が大きく分かれることが分かる。グローバル化の進展を感じつつ、まだ取り組めていない現状が浮かびあがってくる。

大学・短大への進学率別にみると、進学率が95%以上の学校では40%が取り組んでおり、進学率が高くなる学校ほど実施率は高い傾向だ。

図表9 グローバル化を意識した教育への取り組み (全体/単一回答)



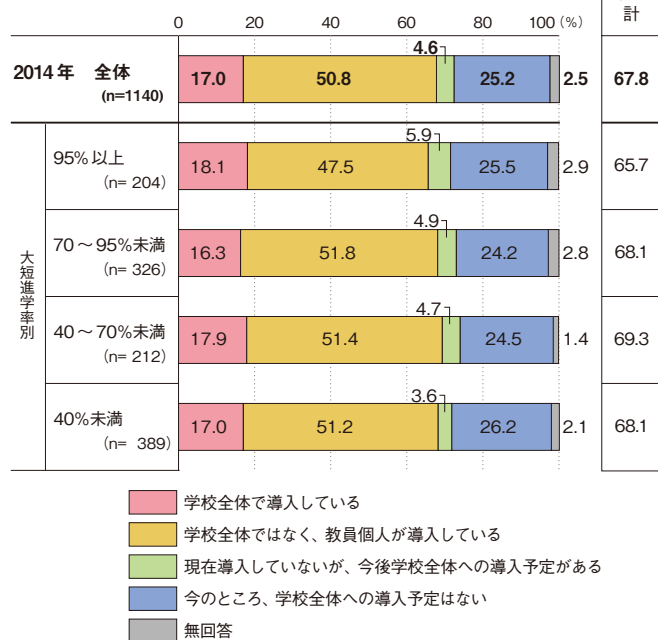
● ICT化への対応

教員個人の取り組みが中心

結論から先に述べると、前ページのアクティブラーニング型授業の取り組みと同じく、「教員個人が導入している」が51%で最多。「学校全体で導入している」は17%にとどまる(図表10)。

データの掲載は割愛するが、ICTを活用した授業の取り組み内容では、「教員が作ったスライドの投影」が77%で最多だが、「調べ学習など生徒がインターネットから必要な情報を収集する」71%、「生徒がプレゼンテーションソフトを使って発表する」67%、「動画や電子教科書などデジタル教材を使う」53%と、生徒自身が活用する内容が多い。授業改善とともに、今後の動向に注目したい。

図表10 ICTを使った教育(授業)の導入 (全体/単一回答)



※「学校全体で導入している」「学校全体ではなく、教員個人が導入している」の合計を「導入・計」とした

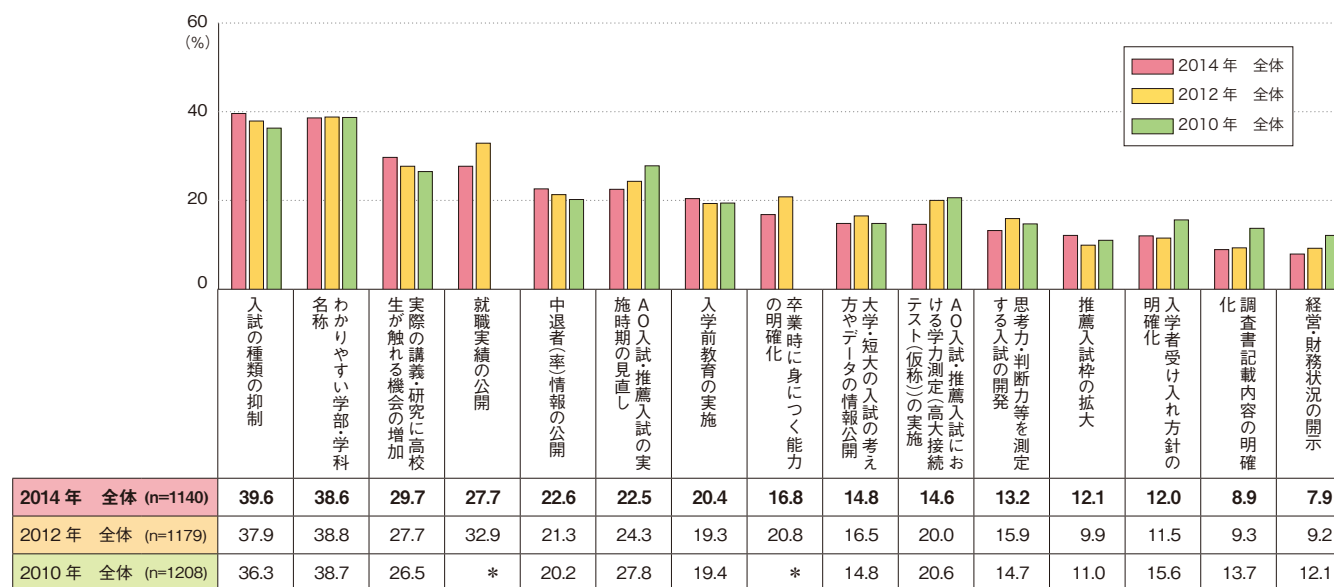
FREE COMMENT

【グローバル化への取り組み内容】

- 英語教育の充実(授業数・内容・資格取得を意識)。国際交流の場の設定(他国の学校訪問、留学生派遣と受け入れ)。学校設定科目「異文化理解」の導入(東京・普通科)
- 地方の学校なので、①世界、日本、学問などにおける先端分野の体験や実習 ②コミュニケーション能力への対応 ③教養の充実(岐阜・普通科)
- 看護科、福祉コースでの学習内容に取り入れている。全校生徒「茶道授業」を正課として取り入れ、日本文化に触れることにより、精神性の高い教育を取り入れている(岡山・普通科)
- タブレットを使って海外の協力校とコミュニケーションを取りながら、課題解決の手法を学んだりしている(東京・普通科)

6 接続の観点から、大学・専門学校に何を求めるか?

図表11 高大接続・連携について大学・短期大学・文部科学省に期待すること【時系列】(全体/複数回答):上位15項目



※「2014年 全体」の降順 [*]:該当項目なし

FREE COMMENT

- 各大学が、どのような社会的課題に対して課題意識を持って、学部学科を構成し、それに対し、どのような研究を行っているのかをしっかりと伝えて欲しい。抽象的過ぎて分かりにくく、他大学との差別化ができていく(北海道・普通科)
- 地域内の大学と高校で授業・講義の実施を、高校生対象に定期的に行うことが出来れば良い。そうすることで、生徒の

- 進路意識向上や正確な理解が進むと考えています。また、高・大間の情報交換も進み、高等教育の活性化にもつながる期待もあるかと思えます(長崎・普通科)
- 調査書の内容を、どの程度活用しているのか。また、全く活用されていない部分もあるのではないか→内容の簡略化が可能ではないのか?(東京・専門学科)
- 高大連携事業の一環として、「出張授

- 業」や「入試相談会」「講演会」等を実施していますが、input型のもが多く、今後はoutput型のプログラムを実施していきたい(高知・普通科)
- 珍名で格式の感じられない学部・学科名、学習内容の分かりづらい学部・学科名の廃止(東京・普通科)
- 特に私立大において、入試のしくみが複雑化し過ぎている(熊本・普通科)

● 大学・専門学校への要望

「入試の種類抑制」がトップ

高大接続の観点から高校が何を求めているかを尋ねた(図表11)。1位は「入試の種類抑制」40%が前回調査の2位から順位を上げてトップとなった。続いて「分かりやすい学部・学科名称」39%、「実際の講義・研究に高校生が触れる機会の増加」30%と続く。

大学のリアルな講義や研究に触れる機会を増やすことで、生徒の学習意欲の喚起や、大学進学を目的を明確にしたいという要望が伝わってくる。

専門学校との接続の観点では、データの掲載は見送るが、「就職実績の公開」が前回同様1位43%に続き、「中退者情報の公開」33%、「AO入試の実施時期の見直し」31%に加え、「実際の授業に高校生が触れる機会の増加」が

20%に上昇している。

●高校の進路指導・キャリア教育の取り組みは、アクティブラーニング型授業への取り組みをはじめとして、今、大きな変化に対応していく「兆し」であふれている。これからの社会を生きる若者を育てるという観点で、高校と大学や専門学校の教育の接続がさらに求められていくだろう。